

川端康成「古都」論
福をめぐってー

ー植物の表象とふた子の幸

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054906

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



川端康成「古都」論

―植物の表象とふた子の幸福をめぐる―

中 條 響

はじめに

川端康成の「古都」は昭和三十六年十月から翌年一月にかけて朝日新聞に連載された作品であり、昭和三十七年に単行本化された。本作では随所で植物が印象的に描かれている。植物の表象という観点はこれまでも何度も論じられてきたものであるが、本作においては、千重子の幸福と苗子の幸福がどのような方向に示されるものであるかが重要な視点であると考えられる。そこで本稿では、千重子と苗子の幸福という側面から植物による表象を論じていきたい。

本作においては、千重子の両親である太吉郎・しげ夫婦が非常に大きな存在として描かれている。このことに関して太田鈴子氏は、本作は継子物語の系譜に連なる作品であり、かつ継子物語の大事な要素の一つである継子いじめが存在しないことが本作品の特徴の一つであると述べている。確かに本作は継子物語であると言えるが、本作においては千重子の父親である太吉郎の存在が、千重子の母親であるしげの存在と同様に重要であることを見逃してはならない。

そしてどちらかに偏らない父親と母親両方の愛情を受けた千重子という視点が本作を読み解く上で、また植物の表象を捉えるうえでも不可欠であると考えられる。太田氏の論においては、千重子の母であるしげとの関係についての論じられており、太吉郎を含めた親子としての千重子との関係にまでは踏み込んでいないという点で、この論には論じつくされていない部分が残されているように思われる。

次に、本作における植物の象徴性について、これまでどのように論じられてきたか整理したい。

杉谷健氏は、本作においてすみれの花ともみじはそれぞれ、すみれの花が千重子と苗子の象徴であり、もみじは物語の舞台である京都そのものを象徴していると述べている。しかし本稿でこのあと述べるように、本作においてすみれは単に千重子と苗子を象徴しているだけの存在ではないと考えられる。また、もみじも、その樹上にすみれが根付いているという事実に着目すれば、京都という舞台である「場」の象徴とは別の意味が付与されていることになるはずである。

また野口祐子氏は本作中のすみれの花について、すみれの花は「千重子の生きる姿の投影」であると述べている。しかし、すみれの花が二株あり、またそのすみれの花が千重子の生活上のさまざまな局面で見せる姿を変えていることを考えると、すみれには、「千重子の生きる姿の投影」という意味よりもさらに象徴的な意味が与えられていると考えられるのではないだろうか。三谷慈正氏は太吉郎と千重子について、もみじを太吉郎と重ね合わせ、千重子が「すみれ」から「北山杉」、そして「楠」へと成長していると述べている。たしかに一見もみじは男性的であり、太吉郎の齢ともみじの年輪を重ねることは自然に見えるが、その上に根づくのが「すみれ」として表される千重子だとすると、もみじが太吉郎のみを表しているという見方には、再考の余地が残されているように考えられる。長谷川泉氏も同様に、すみれの花について次のように述べている。

以上「古都」に出てくる象徴的なすみれは、冒頭と合わせて四か所に記述されている。「祇園祭り」に出てくるすみれだけは、千重子と苗子が相会うことによつて、ふた子であることをはっきり確認し合つたのちの記述にあらわれるものである。ゆえにはっきりと二株のすみれは千重子と苗子をあらわすものとして表現されている。

長谷川氏もすみれを千重子と苗子を象徴するものとしてとらえているが、すみれが描かれる時のすみれの様子の変化を考えると、すみれの花には千重子と苗子を表すという表面的な意味をこえた見方

があるのではないだろうか。

以上の点を踏まえて、本稿では、千重子にとつて太吉郎としげがどのような存在であるかを示し、千重子と苗子の幸福を考察しながら、本作において植物が何を象徴しているのかを考察していきたい。

一 千重子と両親について

本節では植物の表象を捉えるうえで、千重子にとつて極めて大きな意味を持つ存在である太吉郎・しげ夫婦と千重子の関係について考察する。しげだけでなく、太吉郎を含めた親子としての千重子との関係という視座を持つことが、千重子の幸福を捉える上でも、また植物の表象を考察する上でも重要であると考えられる。

千重子と太吉郎・しげ親子は実の親子ではないが、本文中には千重子と太吉郎・しげのそれぞれの互いに対する細やかな気配りや配慮が、まるで実の親子のように自然に行われていることを表現している箇所がいくつも見られる。本節ではそのような場面を例にとりながら、千重子にとつて太吉郎・しげがどのような存在であるかを考察したい。

まず太吉郎と千重子の関係を考察すると、千重子と太吉郎がお互いに気遣いあっていることは本作中幾度となく描写される。一例をあげると、千重子が太吉郎の周りを「かあてん」で覆い、店の音が「やわら」ぐようにと配慮する次に引用する場面である。

太吉郎は机の下から座蒲団の下にひろげて、異国のゆいしよ

ある、じゅうたんを敷いていた。そして、太吉郎のまわりは、南方の貴いさらさをかあてんにしてかこつた。これは千重子の智慧であつた。かあてんはいくらか店の音をやわらげる役にも立つた。千重子はこのかあてんを、ときどき取りかえた。取りかえるたびに、父は千重子のやさしさを心におほえながら、ジャバだとか、ベルシヤだとか、いつの時代だとか、なんの圖案だとか、そのかあてんの話をする。そのくわしい解説は、千重子にわからぬこともあつた。

千重子が「かあてん」を取り換えるたびに太吉郎は「千重子のやさしさ」を感じ取っている。また、太吉郎は千重子のために無造作に「かあてん」を切つて帯にしており、千重子はその帯をしめて太吉郎のいる尼寺に出かけている。この一連の場面には、日常の風景のなかで、親子のやりとりとして互いに気遣いあう関係が存在していることが示されている。

太吉郎と千重子の間に気遣いあう関係があるといっても、それは遠慮や気をつかっているという種類のものではない。次に引用する尼寺での二人の会話からは太吉郎が自嘲的な言葉を口にしても、あえてなぐさめることもなくいつものことと聞き流すことができるという、一緒に長年暮らした家族ならではの安心感が二人の間にあることがわかる。

「もう竹の秋やな。」と、父は言った。

「土塀もくずれかけたり、傾いたりして、だいぶはげてる。わし

みたいなもんやな。」

千重子は父のそんな言い方になれていて、なぐさめもしないで、「竹の秋……。」とだけ、父の言葉をくりかえした。

つまり、千重子と太吉郎はただ気遣いあうというだけではなく、相手の言葉に反応しなくても関係が保たれるという安定した信頼感が根底にあるのである。

尼寺にこもる太吉郎のことを考える千重子は、次の引用のように考える。

「お父さんはあの尼寺で、なにもしていやはらへんらしい。」と、千重子は薄らさびしさが胸にしみる。「手垢で古びた、数珠をかんだりして、どんなこと、考えといやすのやろ。」

時には、数珠の玉をかみくだくようなはげしさを、父が店では、おさえているのを、千重子は知っている。

「うちの手の指など、おかみやしだらええのに……。」と、そう千重子はつぶやいて、頭を振った。そして、母と二人で、念仏寺の鐘をついたことに、心を移そうとした。

父に自分の指をかんだらいいのにとおもう千重子は、太吉郎に無自覚で純粹な感謝を与えうる存在として描かれている。

服部康喜氏はこの場面を根拠にあげ、千重子と太吉郎の間に通常の父娘関係を越えた感情の交わりがみて取れることを主張している。しかしこの主張は二人の外面的な動作にのみフォーカスしており、

これまで見て来たような本作中で描かれている、太吉郎と千重子の関係を踏まえれば、不適當なのではないだろうか。この後も述べることであるが、太吉郎の千重子への視線は、常に千重子の幸福のみに注がれており、そこにそれ以外の夾雑な感覚は示されていない。さらにこの場面では、千重子はその後母であるしげを回想しており、その意味でもこの場面で性的な含みを読み取することは困難であると見えよう。

ここでは千重子が太吉郎に指をかんてくれたらいいと考えているから、千重子と太吉郎の間には性的な意味合いが含まれてくると解釈するのではなく、千重子が太吉郎に指をかんてくれたらいいと思っても、そこになんら性的な意味合いが生じないほど強固な、そして清冽な親子関係がふたりの間にはあると解釈できるのである。

次にしげと千重子の関係について考察すると、北山杉を見て来た千重子が、その夜悪夢にうなされ、しげに汗を拭いてもらう次の場面から、千重子の汗をふくしげに身を任せている千重子は、しげにたいして全面的な安心感を寄せていることがわかる。

「いやあ。えらい汗。」と、母は千重子の鏡台から、ガアゼの手ぬぐいを取って来て、千重子の額をふき、胸もとをふいた。千重子は母にまかせていた。なんときれいに白い胸だろうと、母は思いながら、

「へえ、わきの下……。」と、千重子に手ぬぐいを渡した。

(略)

「頼りない顔やな。お母さんもこっちへ来て、寝たげよか。」と、

母は床を運んで来そうである。

「おおきに……。もう、ちゃんとしましたさかい、安心して、やすんどくれやす。」

「そうか。」と言いながら、母は千重子の床のはしへもぐってきた。

千重子は身を片寄せた。

「千重子、こない大きゅうなつてしてもて、もうお母さんには、抱いて寝られしまへんな。なんや、おかしいやろ。」

しかし、母の方が先きに、安らかに眠ってしまった。千重子は母の肩などの寒くないように、手でさぐってから、明りを消した。

ここではしげは千重子を心配して同じ「床」に入って休んでいる。千重子が心丈夫になるように一緒に「床のはし」に「もぐって」くるしげ、そしてしげが先に寝てしまおうとしげの肩が寒くないように手で探る千重子、些細な描写であるがここでもしげと千重子の睦まじい様子が見て取れる。太吉郎と千重子との関係の中で見られたような細やかな愛情の行交いが、しげと千重子との間にも流れているのである。

千重子がしげと鐘をついたことを思い出す次の場面を分析してみると、こちらでもしげと千重子の間には親子としての自然な関係がはぐくまれていることがわかる。

この鐘楼は新しく立てたものだ。小柄の母がついても、鐘はよく鳴らないので、

「お母さん、呼吸どすがな。」と、千重子は母の手のひらに、手のひらを重ねて、いっしょについたものだった。よく鳴った。「ほんまやな。どこまで、ひびくやろ。」と、母はよろこんだ。

しげと千重子の二人の「手のひら」は「重ね」られ、いっしょに鐘をついている。これはきわめて自然に行われている行為であるが、それだからこそ余計に、しげと千重子の母と子としての関係が自然なものであり、また特別な言葉が必要としないほど二人にとつてお互いが近い存在であることを印象付けることにつながっている。

太吉郎がしげを花見に誘う次の場面では、しげは夫である太吉郎からの電話であるにもかかわらず、千重子に「助けをもと」めて電話をかわつてもらっている。

御室の花見に、娘をつれて来ないかと、嵯峨から不意の電話で、しげはとまどった。夫と花見に行くことなど、ついぞなかった。「千重子、千重子。」と、助けをもとめるように、しげは娘を呼んだ。「お父さんからの電話、ちよつと出て……。」

千重子が来て、母の肩に手をかけながら、電話を聞いた。

「はい、お母さんもつれていきます。仁和寺の前の茶店で、待つておくれやす。はい、せいぜい早う……。」

千重子は受話器をおくと、母を見て笑った。

ここで注目したいのは、しげの肩に手をかけながら電話を聞くという仕草である。この身体動作は、前述の「手」を重ねるといふ動

作と同様に、千重子のしげに対する心理的な距離の近さを物語っており、気安さと親しみの表現であると言える。

千重子と太吉郎の間でも同様の仕草が見られる。秀男が太吉郎のもとに織りあげた帯を見せに來た次の場面でも、太吉郎の肩に手をおく千重子のすがたが描写されている。

「お父さん。」と、千重子はあどけないよろこびの声で、「ほんまに、ええ帯やわあ。」

「……………」

そして、帯の地をさわつてみて、

「しつかり織つといってくれやしたな。」と、秀男に言った。

「へえ。」と、秀男はうつむいていた。

「ここへはばして、見させてもらて、よろしおすな。」

「へえ。」と、秀男は答えた。

千重子は立つて、二人の前へ、帯をのばした。父の肩に手をおいて、立ったままながめた。

ここでは、目の前に秀男という家族ではない人間がいるにもかかわらず、気安くそして親しみをこめた様子で太吉郎の肩に手をおいている。千重子はこの動作を気負いも作為もなく自然に行っている。このことから、千重子にとっては、人前であろうがなかろうが、両親の肩に手をおくという行為はなんの遠慮もためらいも必要としない行為であるということが分かる。特別な意味を込めて手をおいているのではなく、極めて当たり前で自然な行為であるがために、か

えって太吉郎と千重子そしてしげと千重子の関係を鮮明に浮き彫りにしているのである。

前述の、千重子としげと太吉郎の肩に手をかけるという身体的接触には、千重子の両親への親しみと気安さが表れており、このことは、千重子の両親への距離の近さを物語る。とりわけ後者の場面は、秀男という家庭の外の人の前でのごとであり、そういった行為が日常的で自然なコミュニケーションの姿であることが察せられる。このように千重子は実の親子同様に、またはそれ以上の親密さで太吉郎・しげ夫婦と暮らしているのである。両者の間では、血のつながった親子によくみられる親子の葛藤などが描かれることはない。これは実の親子ではないという両者のあいだの変えることのできない距離が、その距離があるがゆえに、実の親子以上に二者の関係を近づける原因になっているためであると考えることができよう。子を授けられなかつた両親と、生みの親から捨てられた千重子。二者の間には実の親子のようにいてくれるという、実の親子でないからこそ、純粹で厚い親子の情が流れるのである。

千重子の動作から千重子と太吉郎・しげとの関係性が看取できる場面もある。次の引用は、千重子が夕飯の買い出しに錦へ向かう場面である。千重子は家へ向かう若い銀行員の姿を見かけ、「足が重くな」る。その時に千重子は店の前の「べんがら格子」に「指さきを軽くふれて歩い」ている。

千重子が良いものかごをさげて出たのと、ほんの一足ちがいに、うちの格子戸へはいる、若い男の姿を見た。

「銀行の人やほ。」

向うは千重子に気がつかなかつたらしい。

いつも来る、若い銀行員だから、さして心配なことではあるまいと、千重子は思った。しかし、足が重くなった。店の前格子の方に寄って、その前格子の一本一本に、指さきを軽くふれて歩いた。店の格子がつきとるころで、千重子は店をふりかえり、また見あげた。

のちに明らかになるが、「べんがら格子」は千重子が捨てられていたまさにその場所である。すなわちそれは千重子が生みの親と別れた場所であり、また同時に実の親と最後に「ふれ」合った場所でもあるわけである。つまりこの場面では銀行員の姿を見て不安になった千重子が、実の親の名残と接触していると読み取ることができる。そして触れていた「べんがら格子」が尽きるところで千重子はお店を振り返る。このお店とはすなわち、太吉郎としげ、つまり千重子の育ての親の象徴である。実の親との無意識の接触が終わったときに、今度は育ての親を振り返る。これはそのまま千重子が実の親に捨てられ、そのあと育ての親である太吉郎としげ夫婦に捨てられた事実に符合する。この場面は、千重子の心が拠り所を求める時、それは太吉郎・しげ夫婦に行き着き見出されることを、あたかも千重子が無意識に理解しているかのように表現している。

これまで述べてきたことから、千重子としげ・太吉郎夫婦の間にはきわめて厚い信頼と深い愛情そして安心感が流れていることがわかる。それは特別な思い入れというようなものではなく、日常の日々

の営為の中に無自覚に存在するやりとりであり、自然な親子の交情と表現すると大仰に感じてしまうほど、日常に溶け込んでいるものである。

千重子は平安神宮での真一との花見の場面では、真一と次のような会話を交わしている。

「うちを見つければつてから、眠った振りをなさったの？」

「なんて幸福そうなお嬢さんが、はいつて来たかと思つて、ちよつとかなしくなつてね。少し頭も痛いところやし……。」

「うちが？ あたしが幸福……？」

この場面では千重子は自身を「幸福」であると意識していない様子が描かれている。一方太吉郎に「かあてん」を帯にしてみたら次の場面では、千重子が太吉郎の思いを意識することが描かれている。

「はさみを持つといで……。」と、太吉郎は言った。

そのはさみで、父はさすがに器用にかあてんのさらさを切った。

「こいで、千重子の帯に、ええやろ。」

千重子はびっくりして、目がうるんだ。

この場面での太吉郎の行動はとても自然に行われているものと感じられる。これは太吉郎の千重子にかけたい思いが一定して常に千重子に向けられているものであり、特別な力みがないからこそかなうものであると言える。ここで千重子の「目がうる」ものは、この時、

太吉郎の千重子への思いが目に見える姿をとって表れ、それを千重子が沁み出す太吉郎の思いの発露として受け取ったからである。

しげとの次のやりとりの中でしげは、千重子から聞くまだ見知らぬ苗子に、千重子が望む以上の思いやりを向けている。

「お母さん、見といやしたやろけど、杉の村の娘に、うちのきものを一枚、やつとくれやすな。千重子のお願ひ……。」

「ええとも、ええとも、羽織もどうやの。」

千重子は目をさけた。涙にうるみかかっていた。

ここで千重子は、しげの千重子へと向けられる思いの変わらぬ強さが、しげの苗子への思いやりの根底をなしていることを感じとる。千重子の目が「涙にうるみかか」るのは、しげの千重子への思いが苗子にもまた向けられており、そしてそのことが千重子にとってどれほど大きな意味を持つかをしげが十分に理解していることを察したからである。ここでの「涙」はしげの千重子への思いが、結晶として苗子にも宿ることを示唆している。

太吉郎と千重子が苗子について話す次の場面では、太吉郎は苗子を引き取り千重子と同じように娘にしたいと千重子に伝えている。

「そうか。」と、太吉郎はためらう風もなく、「千重子。」

「はい。」

「その子にな、なにか、苦しいこと、困ったことが、できたんやつたら、うちへつれといで……。引き取るわ。」

千重子はうつむいた。

「ええな。娘が二人になって、わたしも、ばあさんも、にぎやかや。」
「お父さん、おおきに、お父さん、おおきに。」と、千重子は腰を折った。あたたかい涙が、ももにしみて来た。

太吉郎が苗子も娘にと考えるのは、千重子と苗子の間の肉親的なつながりが、太吉郎・しげ夫婦と千重子の間にも存在することを太吉郎が疑わないからである。太吉郎の持つこの感覚は、太吉郎・しげが千重子へと注いできた長年の情がもたらした血縁なき紐帯への確信がなければあり得ないものであり、苗子を娘にという太吉郎の申し出も、千重子の「幸福」への全き理解なければなし得ないものである。

この時の千重子の「あたたかい涙」は、それらの太吉郎の気持ちに千重子が汲み、肉親じみた「幸福」を感じたことを表すものである。そしてこの「あたたかい涙」が「ももにしみ」るのは、この「幸福」が千重子の感覚的な実感として広がっていることを表現しており、千重子が自らの「幸福」を意識したかたちで感受したこととの証左としての意味を持っているのである。

このように千重子は太吉郎としげの気遣いや、千重子にとつての「幸福」を考えたゆえの恒常的な二人の思いに触れながら、太吉郎としげにはぐくまれた自身の幸福を認識する。千重子が幸福さをはぐくめる理由はまさにここにあるのである。捨子であったという、いわば生みの親からの愛情とは無縁になってしまった千重子が、捨子であることが彼女の幸福さの桎梏ともならず、素直で美しい強さを

持つ人物に育ったのは、育ての親である太吉郎・しげ夫婦の、千重子の生みの親からの断絶にはるかにまさる親愛の情があったからに他ならない。そして、水木真一の父親の「なんで、あなにいきれいなええお嬢さんが、おできやしたんどす。」という言葉に、「親の力やござりまへん。あの子が、そうなったんどす。」とこたえる太吉郎の言葉に表れているように、自分たちはそのことに自覚的でないことで、太吉郎・しげ夫婦には、より一層千重子の幸福さへの感受性を深く涵養する揺籃の器としての意味が付与されているのである。

二 植物による表象について

ここからは前節までの内容を踏まえて、本作中の植物が何を表象しているかについて考察してゆきたい。

まずはじめにすみれの花について考察すると、次の引用にあるように、物語冒頭で千重子はすみれが花を咲かせていることに気づく。

もみじの古木の幹に、すみれの花がひらいたのを、千重子は見た。
「ああ、今年も咲いた。」と、千重子は春のやさしさに出会った。

(略)

大きく曲る少し下のあたり、幹に小さいくほみが二つあるらしく、そのくほみそれぞれに、すみれが生えているのだ。そして春ごとに花をつけるのだ。千重子がものごころつくころから、この樹上二株のすみれはあった。

千重子と苗子知り合わぬうちは、すみれは花を咲かせている。その後、千重子が友人である真砂子と共に出かけた日、千重子は偶然苗子を見かける。ちょうど千重子が苗子を初めて見かけたその日に、千重子はもみじの樹上のすみれがなくなっていることに気づく。次の引用は千重子が初めて苗子を見かけた日に、太吉郎・しげと交わす会話である。

千重子：中庭に顔を向けて、しばらくだまっていたが、「そのもみじみたいな強さ、千重子には……。」と、声にはかなしみがあふまれて、「もみじの幹のくぼみに生えてる、すみれくらいのもんどすやる。あ、すみれの花が、いつのまにや、なくなってしまう。」

「ほんに……。来年の春は、きっとまた咲きまっせ。」と、母は言った。

その後、千重子と苗子が出会い、その二人の関係を秀男という人物が知り、苗子と秀男がそろって時代祭に出かけたあと、次の引用のように千重子は家の二株のすみれの葉が「薄黄ばんで」いることに気づく。

千重子は奥の座敷に、炭火をととのえて、あたりをみまわした。狭い庭もながめた。もみじの大木の苔は、まだ、青々としていた。が、幹に宿った、二株のすみれの葉は、薄黄ばんでいた。

千重子と苗子が出会わぬうちは花を咲かせていたすみれが、千重子と苗子が出会った晩には花が「なくなつて」おり、そして千重子と苗子の関係が二人だけのものではなくなったときに、葉は「薄黄ばんで」いる。つまり、千重子と苗子の関係が進展するに従つて、もみじに根づくすみれの花は生命の盛りを終えてゆくのである。このことを考えてみると、このすみれの花は、千重子と苗子の幸福の端緒となる、二人が邂逅することの予兆としての役割を果たしていると考えることができる。だからこそ千重子はすみれの花を見て、先の引用にあるように、「春のやさしさ」を感じ、「キリスト像の上のすみれの花は、これは、マリアの心のように思われもした。千重子はキリシタン灯籠から、またすみれ花に目をあげた。」とあるように、すみれを「マリアの心」と感じるのである。千重子がこの花を見て感じる「春のやさしさ」とは、千重子がそれと知らず感じ取っていた苗子との再会への意識せざる予期であり、すみれの花を「マリアの心」と感じるのは、すみれの花が孕む新たな幸福の萌芽を感じたからである。

千重子と苗子が行交うと、二人の邂逅の予兆としての役割を終えたすみれの花は姿を消す。そして二人が行き来を重ね、次第に触れ合える関係へと進み、互いの関係の中で実際に「しあわせ」を感じようになるにつれて、二人の関係の進展とは対照的に、すみれの花はふた子の邂逅の予兆としての役割を失い、生命としての色合いを失っていくのである。

ここで一度千重子について考察してみると、前節で明らかにして

きた通りに、千重子にとつて精神的よりどころとなつてゐるのは太吉郎・しげ夫婦である。太吉郎としげは睦まじい夫婦とは言えないにもかかわらず、太吉郎と千重子そしてしげと千重子の関係は睦まじく、強固な親子関係で結ばれてゐる。しかし、だからといつて千重子は自分自身の境遇に何一つ不自由なく暮らしてゐるわけではない。次の引用にあるように自宅のみみじに根付くすみれの花を見て、「孤独」を感じることもある。桜見をして、「花をみんな見ていきいたいの。」と言ひながら桜に生命を感じてゐる千重子に対し、清水の舞台に立ち孤独をかみしめる千重子の姿はちやうど、もみじの樹上のすみれを見て次の引用のように感じる千重子の感慨に対応するものである。

花は三つ、多くて五輪、毎春まあそれくらいだった。それにしても、木の上の小さいくほみで、毎春、芽を出して、花をつける。千重子は廊下からながめたり、幹の根もとから見上げたりして、樹上のすみれの「生命」に打たれる時もあれば、「孤独」がしみて来る時もある。

「こんなところに生まれて、生きつづけてゆく……。」
店へ来る客たちは、もみじの見事さをほめても、それにすみれの花の咲いてゐるのを気がつく人はほとんどない。

千重子が生命に対して抱くこれらの感覚は、千重子自身の出自に深く裏打ちされてゐるものである。千重子にとつてすみれは単に幸福な生命の象徴ばかりではなく、「孤独」を印象付ける花でもあるわ

けである。千重子は生みの親に捨てられたことにこだわつてはいないまでも、やはり忘れたい事実としてはつきりと意識してゐる。しかしかといつてそのことをどうかしたいわけではない。それは、しげと太吉郎の愛情が、千重子が自らの出自に拘泥する意識を持たせたいほど厚かつたためである。このしげと太吉郎の存在が根源にあるからこそ、千重子はどんな状況であつても、身の周りから自分自身の「幸福」へとつながる材料を感じ取る繊細な感受性を失わないのである。千重子は「気がつく人はほとんどない」すみれの花を見て、その生命を深く感じ取る。このように、千重子の「幸福」とは、満ち足りた生活に由来するものではなく、日常の些細なものに目を向け、それらの中から自身の「幸福」を充足させるものを見つけて出すことができる、彼女の内にはごくまれな感性そのものである。そしてそのことが、生命に対してその孤独だけでなく、千重子にささやかな自然にも生命を強く感じさせることにつながつてゐるのである。

千重子は苗子に出会つてから、苗子に自分自身と同じ「幸福」を願うようになる。千重子自身と同じ「幸福」とは、畢竟苗子が太吉郎しげのもとで暮らすことである。次の引用にあるように、千重子はそのことを苗子に伝えてもゐる。

千重子も、苗子のところまでさがつて、苗子の両の肩を、強くくゆすぶりながら、

「苗子さん、うちにずっと、いとくれやすこと、でけへんの。父も母も、そない言うてるし……。千重子はひとりで、さびしい

し……。杉の山が、どない気楽かしれんけど。」

千重子は最後まで苗子と重なる「幸福」を願ひ続ける。太吉郎としげのもとで育った千重子は、それが実現すると信じられる余地のある地面に立っているからである。苗子との二人の「幸福」が重ならないことは、千重子の想像の外にある。

このように考えてみると、千重子の願う「幸福」の有りようは、まさにみみじに根づく二株のすみれの姿そのものである。つまり、みみじに根づくすみれの花は、千重子と苗子それぞれが願う幸福を対置したときの、千重子の願うふた子の「幸福」を表しているのである。すなわち、すみれは先に述べたように、ふた子の邂逅の予兆としての意味と、千重子が願うふた子の「幸福」という意味の二重の意味を負っているのである。

それでもみみじとは、それがあればこそ千重子の幸福があり得るという意味において、太吉郎・しげ夫婦を象徴しているのである。次の引用に描かれるみみじのよわいは、太吉郎・しげ夫婦の長年連れ添ってきた年月と、そのあいだに千重子へと注いできた愛情がもたらした風格を思わせる。

そのみみじは、町なかの狭い庭にしては、ほんとうに大木であって、幹は千重子の腰まわりよりも太い。もつとも、古びてあらい膚が、青くこけむしている幹を、千重子の初々しいからだにくらべられるものではないが……。

ここで今度は苗子について考察すると、苗子は境遇から言えば千重子よりも厳しい境遇で育ったと言える。さなきだに彼女は生みの親からの愛情からも断絶されているにもかかわらず、苗子には千重子にとつての太吉郎やしげのように生みの親の代わりに深い愛情を注いでくれる人物はいない。ただ一人北山杉に囲まれた中で育ち、自らの手で生計を立てて暮らしている。そのような苗子の素性を考えた時、彼女の抱える孤独に思いが及ぶ。苗子の抱える孤独は、千重子が感じる孤独と、捨子であるということに由来しているという意味においては本質的に似通ったものではある。しかし、苗子の抱える孤独とは、苗子には千重子にとつての太吉郎・しげ夫婦にあたる人物がいけないという点で、より体感的で、日常的なものであり、苗子の深部にまで決定的に深く埋め込まれたものであると言える。しかし、右に述べて来たような苗子の来歴が、彼女の心を人への羨みに駆り立てることも、彼女の眼差しを厭世へと指嚆することもない。苗子は、「心がうちより純で、よう働いていて、からだもしつかりしてららしいわ。」と千重子が「つぶやいた」ように、生き別れの姉妹との再会を長年折り続けるような心を失わない人物として描かれている。

苗子に関連して本作中描写される植物は、苗子の家に咲く金もくせいであり、北山杉であり、次に引用するような紅葉したうしである。

向う岸の水ぎわに、葉が赤く色づいて、流れにうつりゆれている、小さい木があった。秀男は顔をあげて、

「あの、あざやかに紅葉してんのは、なんどすやる。」

「うるしどす。」と、苗子は目をあげて、答えたはずみに、ふるえる手で、頭をまとめていたのが、どうしたのか、黒い髪がほどけて、背まで、ひろがり落ちた。

金もくせいに關しては次の引用のように記述されている。

ただ、小学校の少女が、ふしぎと花が好きで、この家に一つみことな、金もくせいがあつて、

「苗子おねえちゃん。」と、その手入れを、まれに、苗子のところへ聞きに來たりする。

「ほつたらかしといて、ええの。」と、苗子は答える。しかし、その小家の前を通るとき、苗子は人より遠くから、もくせいの花の匂いが、来るように思える。それは、苗子にとって、むしろかなしみだ。

苗子が金もくせいの匂いを「人より遠くから」感じ取り、そしてそれを「かなしみ」と感じるのはなぜだろうか。それは千重子の「幸福」がすみれの花に表されていたように、「あたたか」な「幸福」が花ひらくことに重なり、その「あたたか」な「幸福」を、一人生きる苗子は誰よりも先に察知する感覚を持っているからである。そして苗子にとって、そのような「幸福」が自らの「幸福」と本質的に異なることを十分に理解していることが、彼女の感じる「かなしみ」を一層深くさせている。

苗子と共に描かれる「紅葉し」たうるしはもちろん秋にみられるものであり、金もくせいは秋に花を咲かせる植物であり、北山杉は「じつに真直ぐな幹の木末に、少し円く残した杉葉を、千重子は、「冬の花」と思うと、ほんとうに冬の花である。」とあるように、「冬の花」と表現されている。このことから苗子と共に描かれる植物は、秋冬にその見ごろを迎える植物だということがわかる。苗子は、自然が次第に色を失い枯れてゆく季節に盛りを迎える植物と共に描かれている。これは、苗子が厳しい環境のなかでも、あるいは、厳しい環境の中でこそ、その性質が際立つという比喩なのではあるまいか。次の引用にあるように、苗子は千重子に指摘されるまでは、北山杉を「花」のようだととらえてはいない。

「そうどすやるか。いつも見なれていて、わからしまへんけど、やつぱり冬は、杉の葉が、ちよつと、薄いすすき色になんのとちがいますか。」

「それが、花みたいや。」

「花。花どすか。」と、苗子は思いがけないように、杉山を見上げた。

これは、あたかも苗子が苗子自身の性質を自覚していないことの間であるように考えられる場面である。北山杉に囲まれながら過ごした日々は、まるで冬の中でこそ花を咲かせるという北山杉のように、厳しくまなぬ中にあつてもなおそのなかで、千重子の「幸福」を自らの「幸福」と感じることができるといふ、稀とも言える性質を、

千重子よりも自然に近づいて育ってきた苗子の内にはぐくんできた。千重子の望む「幸福」の姿はすみれの花に象徴されていると述べたが、以上のことを考えると、苗子の描く「幸福」の姿は「冬の花」である北山杉に象徴されていると見ることが出来る。

苗子は、自らの「幸福」と千重子の「幸福」が決定的に異なっていることも、そしてたとえ異なっていたとしても、どちらも「幸福」足りうることを知っている。本作中頻りに幻を口にする苗子は、たとえ幻であっても、その幻が自らの「幸福」のよすがとなることも知っている。自らを取り巻く境遇の厳しさのなかで、苗子は千重子と「幸福」の足取りが一致しないという覚悟をおのずから決めている。それは、そのことが自分自身の「幸福」をあきらめることではないと知っているからである。このように、苗子はむしろ千重子よりも、「幸福」のありようが二人の間で異なっていることを、たとえ意識的にではなかったにせよ、十分に知悉していると言える。

苗子は千重子の家で次の引用のように話し、「しあわせ」をかみしめている。

「さいわいは短くて、さびしさは長いのとちがいまっしやるか。」

と、千重子は言つて、「横になつて、もつとお話したいさかい。」と、押入れから夜具を出した。

苗子は手つたいながら、「しあわせて、こんなんどっしやるな。」と、屋根に耳を傾けた。

苗子にとって千重子との邂逅は、千重子が「幸福」であることを

感じることができたという意味でも、またそのことが苗子に十分な充足の感覚を与えたという意味でも、苗子に「幸福」を意識させるに十分なものであった。

苗子は、次の引用にあるように千重子と一緒に暮らすことを望まれても、頑なにそれを拒む。千重子が望むふた子の「しあわせ」の姿と異なり、苗子は二人の「しあわせ」が重なることを望まない。苗子は自分が千重子の「幸福」をのぞみ、そのために千重子とのつきあひをつつしむことは自然なことであり、当然のことであると考えている。

「うちも……。そやけど、お嬢さんのお店へは、苗子はいかしまへんえ。」

「来てもろて、ええようにします。父や母にも話して……。」

「おやめやす。」と、苗子は強く、「お嬢さんが、今みたいに、お困りやしたら、うちは死んでも、かばいにいきますけど……。」

わかつとくれやすやるな。」

「……………」

ここには、千重子と苗子の「幸福」が重ならない原因である、二人の意識の違いが表れている。千重子は苗子に自分自身と同じ「幸福」を望む。太吉郎としげのあたたかな愛情のなかで育った千重子には、ふた子のどちらかにかたむいている「しあわせ」はいびつだからである。しかし苗子は千重子が「幸福」であることが感じられれば、それ以上千重子の生活にふみこむつもりはない。

このように千重子にとっての「幸福」と苗子にとっての「幸福」は重なるものではない。しかし、それにもかかわらず二人の再会は二人にとって「幸福」たりえている。これは、それぞれの「幸福」が重ならないものであつてさへなお、互いの生活の背景に緊密に支えられた「幸福」への感受性の確かさゆえに、二人が「幸福」の意味を見失わないからである。寝静まる町のなかで、「お嬢さん、これがあたしの一生のしあわせどしたやろ。(略)」と言ひ残して去つてゆく苗子の「しあわせ」は、千重子をして「冬の方がきれいやないの。」と言わしめた、冬に美しさの極北を示す北山杉の、一本一本が独立し直立して伸び、風雨にさらされ、なお美しく屹立する姿におのずから重なるものがある。またそれを見送り、苗子にこばまれてもお二人の「しあわせ」を望む千重子の「幸福」は、二株のすみれの花に自身と苗子を仮託した、そのすみれの花に重ねられるだろう。このことは、すみれの花が作中第一章にあたる「春の花」として、北山杉が終章にあたる「冬の花」として対照されていることにも表れているのである。

このように、千重子と苗子それぞれを「幸福」たらしめる境遇の違いがもたらした、二人が互いに望む「しあわせ」のあり方の違いこそ、二人の「幸福」が重ならないゆえんであり、また同時にそれぞれを「幸福」にしているゆえんでもあるのである。すなわち、千重子は苗子と一つの根から出るすみれの花のような「しあわせ」を望んでいるのに対して、苗子は北山杉のようにそれぞれの根がことなる「しあわせ」を望んでいるからこそ、二人の「幸福」は重ならないながらも、二人の「幸福」の前途は途切れぬままに、千重子と

苗子の行く末は静謐な「幸福」への予感を孕むのである。

おわりに

本稿は千重子と苗子の幸福さについて言及しながら、植物の象徴性について新たな視点から論じ、本作では二人の幸福を植物に託するという形で表現していることを述べた。すなわち本作では、すみれがふた子の邂逅の予兆としての意味と千重子の望む幸福の二重の意味を表し、もみじが千重子の幸福の礎たる太吉郎・しげ夫婦を表し、北山杉が苗子の幸福を表すという植物による表象がもたらされているのである。

本作で描かれる植物による表象からは、「古都」が表現して止まないふた子のしあわせを、物語に通底する基調として享受することができるように思う。そして本作が筆者を、千重子と苗子の幸福それぞれが実を結ぶ想像へといざなつてやまないのは、本作が幸福の本質の偽らざる姿を呈示したものと認められるからである。ここに、本作を川端の考える一つの幸福の形を提示したものであると想定したとき、本作中千重子と苗子が感じるあえかなうれいは、彼女らの幸福を根底から揺さぶるものだとは思われない。

川端は幸福について次のように書いている。

しかし、人にいったんあつた幸福、幸福の時は、それが過ぎ去り、忘れられたとしても、その人の生から、決して、消え失せたのではなく、無に帰つたのではない。

いちどめぐりあひ、めぐまれた幸福は、終生不滅である。

私は強ひて幸福を求めてはいない。幸福は求めるよりも感じ
るべきものである。自分に求めるよりもむしろ人に與へるべき
ものである。

右の言は、川端が千重子と苗子において表現した幸福を言い得た
ものとしても語える。川端が畢生描こうとしてきたものを本作中に
も読み取るうとするならば、蓋しそれは千重子と苗子の幸福におい
ても、否、千重子と苗子の幸福においてこそ見るができるだろう。

また、本稿で分析した植物の表象は、本作においてばかりではなく、
『母の初恋』（婦人公論）昭和十五年一月号）において一度のみ叙述
される桜や、『朝雲』（新女苑）昭和十六年二月号）における松葉と
桃など、川端作品において今後も十分に検証される余地のあるテー
マであると思われる。今後の川端研究において、川端がいかに植物
を象徴的に用いてきたかを明らかにすることは、川端文学の一端を
つまびらかにし、その特質を明らかにすることにつながると期待し
てゐる。

(i) 太田鈴子 「川端康成『古都』論——継母子物語の系譜としての
一考察」（學苑 昭和女子大学光葉会編 五九〇号 平成元年一
月）

(ii) 杉谷健 「川端康成作品論『美しさと哀しみと』『古都』の
比較分析」（福岡大学日本語日本文学会二十四 平成二十六年）

(iii) 野口祐子 「川端康成『古都』におけるすみれの花と時間感覚」
（京都府立大学学術報告「人文」第六十一号）

(iv) 三谷憲正 「川端康成『古都試論』——『衰滅の予兆と萌芽の予感
と』」（稿本近代文学二十 平成七年十一月）

(v) 長谷川泉 『長谷川泉著作選⑤ 川端康成論考』（明治書院 平
成三年十一月）

(vi) 服部康喜 「『古都』論——隠された風景——」（川端文学の世界3
その深化 勉誠出版 平成十一年四月）

(vii) 川端康成 「『私の幸福と思うとき』 幸福の時」（女の部屋No.1
中原淳一プロダクション 昭和四十五年四月）

「古都」本文の引用は、『川端康成全集』第十二卷（昭和四十五年
五月 新潮社）に拠った。